

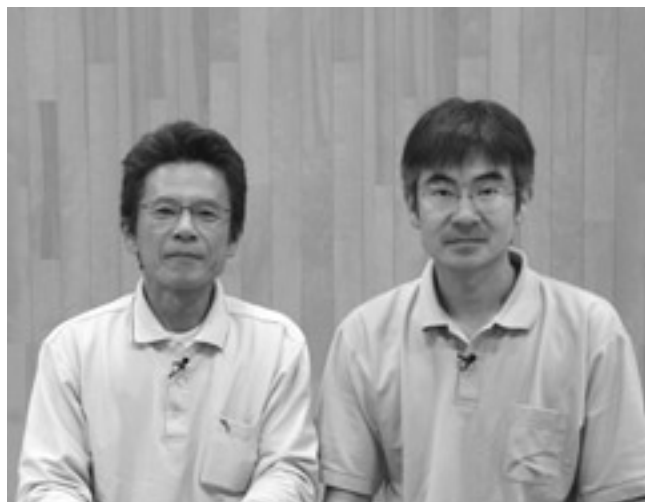
子どもたちが引き継ぐ 地域の伝統行事

国の重要無形民俗文化財

かつては因幡地方の各地で広く行われていた「菖蒲綱行事」。最近では少なくなつたこの行事を、子どもたちの自主的な活動として150年以上続けているのが「宝木の菖蒲綱」です。昭和62年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。それにあわせて、この行事をきちんと後世に伝えていこうと発足したのが「宝木菖蒲綱保存会」です。

菖蒲綱の行事は、端午の節句（菖蒲の節句ともいう）の

ほうぎしょうぶつな 宝木菖蒲綱保存会



小塩 英夫 さん
Hideo Koshio

村上 昭夫 さん
Akio Murakami

子どもが主役で運営

この菖蒲綱行事の準備は1カ月前から始まります。会長の小塩英夫さん（ひでお）も、子どものころには菖蒲綱に参加し、大将も経験しました。「1カ月前になると、小学校1年生から中学校2年生までがみんな集まって、応援歌の練習を始めるんです。ふだんは新町も古町も仲良く一緒に遊んでいるんですが、そのころになるとライバル心が芽生えて、火花が散るようになりましたよ」と小塩さんは当時を

振り返ります。

子どもたちは、歌や相撲の練習をする一方で、前日の深夜に綱に縋り込む菖蒲、カヤ、ヨモギを採ってきて、協力し合い準備を進めていきます。当日早朝に力が必要な本綱縋りのみを大人たちが手伝って綱を完成させ、行事の準備は整います。

前日には、新町の子どもたちは公民館に、古町の子どもたちは大将の家に泊まり込みます。副会長の村上昭夫（あきお）さんは「子どもながらに楽しみましたよ。夜になると古町に偵



本綱縋りのようす。
15本の縄を1束にし、これを3束作ります。その3束を1本に縋り合わせ、綱の頭に菖蒲やヨモギを束ねて完成。大人の出番はこの時だけです。

古墳の時代に タイムスリップ!

今春の鳥取自動車道路河原インターの開通は記憶に新しいところですが、その整備工事にあわせて2003年に発掘調査が行われ、さまざまな遺跡・遺物が見つかったのをご存じでしょうか。

そのうち、古墳時代中期の5世紀末から6世紀前半ごろの古墳である倭文6号墳から出土した武具・馬具は、鳥取の古墳時代を考えるうえで大変重要な発見でした。出土した**三角の板を**鋏（さく）でとめて形作ったもので、**三角鋏留短甲**という



倭文6号墳出土「短甲」

名前がついています。鋏でとめることでより強度を増した、しっかりした作りの鎧（よろい）です。また特徴的なのは、その胴の中に**鬘（かぶと）や鉄製のやじり**を納めた状態で副葬されていたことです。このような例は、大阪の新沢千塚古墳

群に類例があるくらいで、全国的にも数少ない事例です。

馬具は、騎馬の風習とともに古墳時代中期に朝鮮半島から伝わりました。その馬具の一種である**鬘（くつわ）や杏葉（ぎょうよう）**（馬を飾る道具）がお墓の中から出土したということは、鳥取にはいち早く最先端の技術を受け入れることのできた人たちがいたということです。倭文6号墳は13（センチ）ほどの円墳で、必ずしも大きな古墳ではありませんが、当時として備え得るありとあらゆる武装とともに丁寧に葬られた、地域の有力者が眠っていたのです。古墳時代、倭文の地には、鉄の鎧兜を身につけ腰に刀を佩いた人たちが騎乗して活躍したことでしょう。

鳥取市歴史博物館では7月25日から鳥取市合併5周年を記念して、本市の文化財を紹介する展覧会「因幡地方の名品」を開催します。縄文時代から近現代に至るまで、指定文化財を含めた名品の数々をご覧になれます。

この夏、やまびこ館で私たちの暮らす郷土の文化財のすばらしさに触れてみてください。

鳥取市歴史博物館学芸員 田鍬美紀

問い合わせ先

やまびこ館 上町88 (0857) 23-2140



大綱を一生懸命引っ張り合います

察に行ったり、夜食を食べたりというのが思い出に残っていますね」と話します。そして当日は、前述のとおり綱引きと相撲で競います。

子ども同士で学び合う

子どもたちは、行事のほとんどの部分を担っています。中学2年生の子が団長（以前の名称は「大将」と副団長（以

前の名称は「団旗」になり、子どもたちを率います。「行事の一から十までをやられたら一人前なんです。この行事が終わると一つ、おせになった（成長した）気がしましたね」と小塩さん。村上さんは「ふだんは同級生の横のつながりしかありませんが、この時は小学1年生から

中学2年生までの縦のつながりができるんです。上の子は下の子に歌や綱の作り方を教え、何年かすれば、今度は自分が教える側になる。そうやって成長していくんですね」と続けます。

後に伝えるための改革

宝木集落でも、一番の懸念は少子高齢化です。

今年の参加者は、新町が6人、古町が11人。「以前から新町の方が少なく、綱引きでは勝負にならなかったんですが『綱引きで負けても相撲で勝とう』と気合いを入れていました。今の状態は気合いではどうしようもない、行事が続けられないかもしれない段階ですね」と小塩さん。村上さんも「菖蒲綱という行事は、子どもを成長させるし、大人とのつながりもでき、宝

木祭の大名行列など、ほかの行事の運営にも役立つんです」。2人とも、行事を続けていくことの難しさと大切さを痛感しています。

保存会では、「対象年齢をひろげる」「女の子や大人の参加の仕方を考える」など、改革案としていろいろ考えているとのこと。来年以降も行事を存続させるため、保存会の役割がとて重要になっています。子どもたちのやる気と、大人たちの支えによって、この貴重な伝統行事がこれからも末永く続いていくことでしょう。